

遊ぶのも仕事

西南風
小



例年のことながら、厳しい残暑が続いています。九月は暑いのが当然の感覚なので、残暑というのはおかしい気もするほど季節感が変わってきています。お昼休み前に、左の指標に基づいて赤・紫だから「外で遊ばません」という放送が連日流れています。外で遊べるのは朝ぐらいいのですが、朝は時間が短いのです。朝から、モウモウと土煙が立つくらいの勢いで走り回る児童の姿をよく見かけては、遊びたくてたまらないのだろうなと感じます。そこで、今週から火曜日と金曜日の朝遊びが十五分間延長されることになりました。上の写真では分かりづらいですが、朝のグラウンドは大盛況です。その大盛況ぶりに拍車をかける出来事がありました。おじねんせいとの朝遊び参戦です。（ご存じでしょうが、「おじねんせい」とは、毎朝ランニングがてら子どもたちの登校を見守ってくださる本校保護者の方です。多少見た目が奇抜ですがここではおじねんせいと書かせていただきます）子どもたちから、「おじねんせい」と鬼ごっこがしたいという熱烈なラブコールがあったのです。今朝から参戦することになりました。

ねっちゅうしょうをふせごう

かおマークのみ

とどではあそべません

- …とどあそびするときはきゅうけいをとひながら
- …とどあそびするときはこまめにおみずやおちゃをのみましょう
- …ときどきみずをのみましょう

今朝は午前七時半から登校指導をしました。今日もなかなかの暑さで、子どもたちは頬に汗をしたたせ、汗びっしょりになって登校してきました。学校に到着したときにはすでに疲れていますので、当然テンションは低めです。大きな声で元気に笑顔であいさつを返す子どもは五人に一人程度かと思えます。（下校時はほぼ全員があいさつしてくれそうです）午前八時近くになると登校のピークは過ぎ、グラウンドで遊ぶ子どもがどんどん増えてきました。そこに、三ツ石駅方面からいつもの声が聞こえてきました。「おはよおおおおおお！」

おじねんせいです。数人の児童は、すでに鬼ごっこが始まっているかのよう、笑顔で坂を駆け上がってきました。ほどなくおじねんせい「よろしくおねがいます！」と、グラウンドへ入場して参戦。すると大勢の児童がおじねん



んせいの周りに集まり人垣ができました。しばらくして、おじねんせい走り出すと、「キャー！」と逃げ惑う大勢の子どもたちが大きな生き物のよう見え、ダイナミズムを感じました。

子どもたちがあまりにも楽しそうなので、私は写真に収めようと近くに寄って行きました。子どもたちの澆刺とした笑顔と澄んだ眼差しを見て、ありがたいなあと思っていると、「校長先生も鬼ごっこしよー！」の声が。これは当然の成り行きでしょう。ありがたい。ありがたいが体力的には厳しいしかし、子どもたちの盛り上がり水に水を差すわけにはいきません。おじねんせいのご協力にも答えるべきです。

「よし！ やろう！ 私も鬼ね。3・2・1 ゴー！」

蜘蛛の子を散らすように、子どもたちは四方に逃げていきました。それを追う二人のおじねんさん。ええ、わかっていますとも、捕まる捕まらないではなく、追われるスリルが鬼ごっこの醍醐味です。そのあたりのツボを押さえつつ、次から次へと標的を変えては追いかけてきました。いつのまにか、おじねんは三人に増えていました。中島教頭も参戦しました。

次に子どもたちが鬼になりました。私たちが鬼の時は、追いかけたら程よいところで追いかけるのをやめたり、標的を変えたりしつつ、その合間に休むことができました。自分のペース配分が可能だったのです。しかし、追いかけるとなると全く話が変わります。子どもらは、執拗に、地の果てまで追いかけてくる勢いなのです。しかも複数で。

市民ランナーであるおじねんせいや中島教頭はともかく、ただの市民である私は、もう命がけで逃げました。普段やらない全力疾走により、心拍数が爆発的に上がり、滝のように汗が出続ける様は、「教師生命」どころか、「生命」の危機を感じるほどでした。八時二十分の予鈴で、子どもたちは教室に戻って行きました。口々に「また遊ぼうね」と言っていました。気づけば、何人かの担任も運動場で一緒に遊ぶ姿がありました。何と微笑ましい。

それから十分ほどすると、授業の音が聞こえてきました。いつもより元気がいいなと感じるとともに、子どもにとっては、外で元気に遊ぶことも大事な仕事だなど改めて感じました。

私にとっては命がけの朝活でしたが、終わった後の気分は案外悪くないと思ったところです。